

2005年日本のうたごえ祭典inひろしま総括

2005年日本のうたごえ祭典inひろしま実行委員会

はじめに

”被爆60年 輝けいのち・憲法九条“。2005年日本のうたごえ祭典 in ひろしま(以下、ひろしま祭典)は11月4～6日、広島グリーンアリーナを主会場に、7部門の合唱発表会、オリジナルコンサート、3つの大音楽会に全国・地元のべ13600人が参加し、大きな感動をのこし成功させることができた。

4日、音楽会 ピースウェーブコンサート は、厚生年金会館ホール2000席を満杯にした。迫力あるうたごえ合唱団の平和をもとめる演奏と、細やかな表現で人々の感性に迫る独唱やピアノ演奏、地元の優れた芸能など、平和の波にふさわしい音楽会となった。

5日、野外音楽会 いのちのハーモニー 。ライトアップされた原爆ドーム前、元安川に揺れる灯籠の光と被爆ピアノの音色は、この年・この地につどい歌う意味を、2500人の参加者が感じる事ができた荘厳なコンサートであった。

6日、大音楽会 ヒューマンフェスタ は、グリーンアリーナで行われ、4600人が参加した。このヒューマンフェスタは、被爆時、市内を流れていた7つの川をイメージし、生命の讃歌・核兵器廃絶・平和 国際連帯・郷土芸能を7つの構成にした、歌と太鼓と踊りによる魅力的で感動的な大音楽会を作り上げた。

ひろしま祭典は、被爆・戦後60年という節目であったと同時に、平和憲法がおびやかされる中、“うたごえは平和の力”という言葉の意味をあらためて実感した多くの人々の共感と連帯で成功した。

2004年8月6日、広島市は平和宣言の中で「核兵器のない世界に向け、被爆60年の来年までを、記憶と行動の1年とする」と宣言した。日本のうたごえ祭典inひろしまは、平和宣言を实践した音楽会として歴史に語られるだろう。

祭典を成功に導いた地元の多くの支援者、支援団体、全国のうたごえの仲間から心から感謝したい。

とりくみの経過

ひろしま祭典開催決定

04年5月、2005年日本のうたごえ祭典の広島開催の検討に入った。祭典まで1年半だった。幸い11月初旬連休の会場確保の見通しがついた。被爆60年の節目の祭典として被爆地広島から発信する重みと、95年日本のうたごえ祭典inひろしま《ピースウェーブコンサート》にはじまったこの10年のピースウェーブコンサートの蓄積を生かせば可能であると、6月、広島のうたごえ協議会において開催を決定した。

企画 夢語りとアピール

7月のピースウェーブコンサート、夏のかずかずの平和のとrikくみをはさみ、長野や沖縄の祭典を念頭において広島でどういう祭典にしたいかの夢語りを打ち上げ等々さまざまな機会に展開され、実行委員会準備会が立ち上がる10月には祭典企画アトランダム案としてまとめられ、祭典のイメージが膨らんだ。この準備会（うたごえ協議会5団体プラス2団体20人）が祭典運営委員会として活動をすすめた。

一方、広島合唱団はこの年、団創立50周年を迎え、記念企画として団史制作、記念レセプション、記念CD「ねがい」制作、記念演奏会（05年3月）の4つの事業をすすめていたが、レセプション（12月）は213人の参加を得て、うたごえ祭典の開催を内外に大きくアピールする場となった。

全国企画懇談会（12月）で祭典の骨格が固められ、企画の大枠が方向づけられたのをうけて、05年1月、祭典全体のレイアウトを構想した。

基本方針案の決定

05年1月25日、第1回実行委員会を15団体29人で開催し、以下の企画構想、祭典・3つの音楽会構想、組織活動方針でとりくむこととなった。

【企画構想】

被爆・戦後60年、21世紀の羅針盤・憲法9条をめぐる節目の年に、「うたごえは平和の力」を合言葉にすすめてきたうたごえ運動の蓄積を、運動内外の広範な人々と共に創りあげる祭典にする。

「被爆60年に向けて被爆の記憶を呼び覚まし、体験の継承や共有を通じて核兵器廃絶への“希望の種”を蒔く行動の一年にしよう」（04年広島平和宣言）の呼びかけに答え、「広島が目指す“万人のための故郷”には豊かな記憶の森があり、その森から流れ出る和解と人道の川には理性と良心そして共感の船が行き交い、やがて希望と未来の海に到達」するという宣言に盛り込まれたひろしまの夢を企画に生かし、夢をかたちにする手作りの祭典にする。

「オキナワーヒロ・ナガー第9条」を合言葉に、いのちの輝きと平和への願いを歌いあげる祭典にする。

広島そして瀬戸内の自然・風土、そこに息づく人々の願い、未来をになう青年そして子どもたちの姿がいきいきと躍動する祭典とする。

【祭典 3つの音楽会構想】

祭典では3つの音楽会をとおして、いのちの讃歌・平和へのねがい・希望のうたごえが幾重にも鳴り響くことを基調とする祭典構想が提起された。

祭典初日には毎年夏に催している ピースウェーブコンサート を置き、世界に被爆60年・ヒロシマのメッセージをきっちり届ける音楽会とする。また、地元と全国からの参加者がともにいのち輝かせて歌い楽しみ希望を分かち平和音楽祭として、大音楽会 ヒューマンフェスタ を祭典最終日に開く。そしてその中日を、コンサートでもフェスタでもない開かれたメモリアルな空間で、“祈りー和解ー希望”をテーマに野外音楽会 いのちのハーモニー を持つ。

【組織活動方針】...「うたを広げ、歌って参加する人を組織する」

各企画ごとに組織する合唱団づくりを企画部と共にすすめる。

各地に出向き各地の活動と連携し、いっしょに歌って宣伝し、祭典参加をすすめる。

大小のうたう会、うたごえ喫茶、演奏会を計画的に開催する。

「祭典合唱曲集」「2005祭典歌集」などの作成に参加し、その歌集の普及をしつつ歌い手を増やしていく。

とりくみの展開

祭典運動スタート

呼びかけ人には、各界の幅広い分野で活躍されている方々72人から賛同いただき、祭典の広がりをつくるスタートとなった。

2月13日、全国祭典実行委員会（琵琶湖）で全国からのあつい期待と連帯の中で、基本方針案・企画案が大筋で承認された。

そこで出された意見・提案もふまえて、それぞれの音楽会でうたう歌・演目を確定していった。ピースウェーブコンサートのプログラムの中心には、広島で30年ぶりの全曲演奏となる「炎の歌」（土井大助詩、外山雄三曲）を置いた。

また、“被爆60年・いのち輝け 憲法九条『平和のうた』”募集の中から「へいわのうた」「ひとつのピース」が祭典曲となった。

3月から歌集づくりに入り、今までの「祭典歌集」に加えて、新たにヒューマンボイス8曲を中心にした「祭典合唱曲集」をつくり、1000人の大合唱をめざすこととした。

3月、賛同募金のとりくみに入り、全国・地元幅広く呼びかけた。賛同者の広がりがチケット組織につながることをふまえて、地域、団体別に指標を持ち、チケット販売開始前にと、6月末日を締切り日とした。実際には7月以後も続いたが最終的には広島は目標3000口に対して2613口、全国は目標2000口に対して2500口を超え、合わせて5100口を越え超過達成した。

至るところで「歌って宣伝」

とにかく「歌って参加」する人を増やそうというとりくみは、年明け一番「新春うたう会」（音楽茶房ムシカ、100人）から始まった。

3月、広島ではじめて開催された「九条の会」の講演会で祭典横断幕をひろげて歌っての宣伝し、教育基本法を守る集会では「ねがい」をふくむ合唱構成の指導を通して参加を訴えた。NPT条約再検討会議のニューヨーク行動には、企画委員長の高田龍治が日本のうたごえ代表団団長として参加し、現地のうたごえ行動で大いに力を発揮し、また、ひろしま祭典の大切なアピールの場とした。

5月、フラワーフェスティバル・マーガレットステージで演奏・宣伝し、7月には広島市の奨励する「水辺のプロジェクト」の一環として、「水辺のうたう会」を催した。元安橋東詰緑地帯のオープンスペースで祭典横断幕をかがげ道行く人とともに、100人を超える人たちと歌い交わし広く祭典を呼びかけ、また、祭典中日の野外音楽会の雰囲気を感じさせる催しともなった。

その他、NLP反対岩国集会、各区での平和まつり、網の目平和行進等々での歌って宣伝と賛同募金のとりくみが組織・宣伝部を中心に精力的に行われた。

ピースウェーブ合唱団、うたう会

3月の広島合唱団50周年記念演奏会では、記念合唱団が組織され「アメイジング・グレイス」「子どもを守るうた」他を80余人でうたい、祭典への道筋をつけた。4月、市民公募のピースウェーブ合唱団の発会式には、「炎の歌」を歌う呼びかけの新聞記事を見た7人の参加者を含め72人が集まり、最終的に102人に達した。5月からは夏の「核兵器なくそう女性のつどい」の練習がはじまり、祭典で歌う「似島」「さくらよ」「ねがい」の3曲を芯にすえたオープニング企画の指導を祭典祭典運営委員が担当し、広島の多くの女性達に親しめるよう準備した。この間、県北の三次、県西部の福山で開かれているうたごえ喫茶、何年かぶりかで復活した呉市のうたごえ喫茶に、その都度実行委員会からも応援参加して、歌集の普及と祭典への「歌って参加」を宣伝した。

ヒロシマの夏・ピースアクション

7月から8月にかけて、原水禁世界大会開会及び関連行事、全国保育合同研究集会等数々の集会や大会が広島で開催された。これらの集いの文化企画の制作・練習指導、演奏への参加やミニコンサートを行いながら、祭典の宣伝と「歌って参加」への道筋を作り、方針を訴えていった。特に保育合研でのうたごえ交流会は100人の合唱隊、核兵器なくそう女性のつどいでオープニングは200人の合唱隊と子どもの遊ぶ姿もかわいい夢のあるステージとなった。また、福岡で行われた教育のうたごえ祭典、原水禁長崎大会等、全国のうたごえの仲間ひろしま祭典への連帯を呼びかけた。地元での「歌って参加」の体制づくりや組織活動の実質は、この一連のヒロシマの夏・ピースアクションが出発点となった。

ヒューマンフェスタ《7つの川》プロジェクト

ピースアクションをうけて、祭典の柱＝大音楽会に歌って参加しようと、ヒューマンフェスタ《7つの川》プロジェクトを立ち上げた。和太鼓・生命の詩 核と世界の子どもたち 生命をうたうダンス 共に生きる街 子どもを守るうた ピース・9 ヒューマンボイス のチームがそれぞれ独自のプロジェクトとして動き始めた。(また、《7つの川》プロジェクトとあわせて「ねがい」プロジェクトを立ち上げ、NHKの取材に対応しつつ、大音楽会の「ねがい」の演奏の仕方等の検討をすすめていった)以下「共に生きる街」を例に、そのとりくみの一端を。

【共に生きる街】

保育・医療・教育・福祉に携わる人々や高齢者・障害者・女性・子ども等、多くの階層の人たちが願いを一つにし生き支えあう「共に生きる街」をステージに実現しようとうたごえサークルや市内外でのうたごえ喫茶はもちろん、年金者組合・医療生協・女性団体・医労連・共同作業所・労働組合・保育合研等々、広く呼びかけ、地元の参加目標を600人とした。

年金者たちは広島の高齢者大会で発信された「ときめく時間の中で」の「いくさの時代を過ぎて...」に思いを込めた。医労連は悲願である広島県の子どもの病院設立をねがう「生

まれた命大切にしたい」を組合学習会で練習時間を確保した。保育士達はダンス「生命歌いましょう」とくみあわせて保育士仲間が創った「さくらよ」に力をそそぎ、作業所の仲間は自分たちの夢実現への意気込みを歌った「もっと高く」を手話つきで練習した。

祭典ステージでは全国からの年金者組合、医労連の仲間の応援を得て600人を越える「共に生きる街」合唱団が地元4人の指揮者を得て、いのちの賛歌を歌い上げた。

広島のうちごえ祭典（9.23）

ピースウェーブ合唱団は「炎の歌」と「アメイジング---他8曲」の練習を積み上げ、ヒューマンフェスタ《7つの川》プロジェクトも軌道に乗った。

そして9月23日、広島のうちごえ祭典をこのプロジェクトの最初の集結点とし、祭典のイメージを具体的につかむシミュレーションの場とした。80人による和太鼓合奏「生命の詩」、120人の「子どもを守るうた」やピースウェーブ合唱団による「アメイジング・グレイス」、また祭典歌集を広めながらの「共に生きる街」ステージなど、参加者は「ああ、こんな風になるのか」「これはすごいことになりそうだ」などの感想を抱いた。なかでも和太鼓合同は指導者の今福優氏のなみなみならぬ熱意が子どもをふくめた80人の演奏者の真剣で迫力のあるステージを展開させ、参加者全員に祭典への意欲を喚起してくれた。

「折り鶴」プロジェクト

東京のうちごえから発せられた「被爆から60年、ひろしま祭典に願いを込めた60万羽の折り鶴を持ち寄りましょう」に応じて全国で鶴を折るとりくみが展開され、この祭典にさまざまな思いで参集する人々の心をつないでいった。広島では「折り鶴」プロジェクトを立ち上げ、その願いのこもった折り鶴で祭典を彩る「折り鶴・絵パネル」をつくるとりくみや11月6日8時15分に「折り鶴の日のつどい」をもち、千羽鶴を「原爆の子」の像に献呈した。祭典中に折り鶴は328992羽に達した。

全国の参加運動

全国からの参加運動は、「うたって参加」を基本に3000人の目標でとりくんだ。1000人の大合唱「ヒューマンボイス」は、合唱曲集も3000を超える普及をやりきり、さまざまな講習会や合同練習会を積み重ね最終的に900人を越える登録が実現した。“この時に、この地で、この歌を、この指揮者で、1000人で”という企画の構想、選曲、指揮者の魅力が参加運動につながった。

各企画ごとの参加運動もブロック、県、合唱団単位での取り組みをすすめた。京都の“ピース9合唱団”や300人の「子どもを守るうた」などのとりくみを学びたい。

全体としては、近年最高の合唱発表会参加があったにもかかわらず、大音楽会参加の目標は達成できなかった。今一度、大音楽会への参加運動を柱にした祭典の持つ意義を明確にしなが、各県ごとの“祭典プロジェクト”を確立し祭典運動を協議会の活性化、拡大・強化と結びながら取り組むことが求められる。

．組織宣伝、事業財政活動と運営体制

チラシ・ポスター、マスコミ関係

祭典チラシは、仮チラシ2万枚、本チラシ7万枚を印刷し、大音楽会の宣伝に絞ったチラシ1万枚も増刷し、カラーコピーのポスターも作り、各種コンサートや各種集会を中心に配付し、市内外の公共文化施設等、最大限に活用した。

ピースウェーブ合唱団公募や、祭典に向けての記者会見を行い、また、コンベンションビューローと広島市文化財団発行「To You」に祭典の内容が紹介された。中国新聞、NHKローカルで祭典の取り組みを紹介。NHKは祭典翌日全国放送で「ねがい」の特集を放映。また、朝日新聞も報道した。また、終盤には主要な組合が機関紙に祭典記事を載せ、県労連は、FAXニュースで一斉送信を行った。

祭典ニュース

祭典ニュース「相生橋」が週刊で6カ月間23回発行された。特にピースウェーブ合唱団では、「相生橋」はその活動の大きな指針となり、団員同士の、又サポーターや他の分野の運動とのつながりを知らせ深める役割を果たした。この「相生橋」と全国協議会発の「うたごえだより」は地元と全国の動きを結び励まし、支え合う力となった。

チケット普及

チケット組織は8月後半から始まった。各種団体86カ所への配券と普及依頼。実行委員、呼びかけ人、PW団員及び各プロジェクトの出演者、OB、サポーター等、計310人に配券した。9月に入り再度、労働組合等へチケット普及の依頼。後半は大音楽会への地元3000人組織に目標をしばり「歌って参加」する人たちがその周辺に広げていくことを最大の手だてにした。広島のうたごえ祭典後の第5回実行委員会(10.5)では祭典成功への思いが熱く語られ、各サークル、地域の組織目標を明らかにして持ち帰り、以後は週報体制で祭典を迎えようと確認した。最終盤の週報体制で広がりをつくったが、「歌って参加」から、まわりへの人へのチケット普及が遅れもあって、目標には届かなかった。

うたごえ新聞の役割と拡大

うたごえ新聞はもっとも近いサポーターに祭典を知らせる何よりの手だてであった。また、創刊50周年へ向けての読者拡大キャンペーンの中で、年頭の祭典へ向けての広島スタッフの対談記事、コラム「くまさんのまっとるけーきんさいよ」や被爆地を案内する「ヒロシマシリーズ」など全国への発信記事が地元の未読者に働きかけるための大きな励みとなった。広島合唱団レセプション参加者、呼びかけ人、ピースウェーブ団員を対象とした拡大運動にとりくんだ。後半は特に地元祭典出演者への取材記事、指揮者からのコメント等が好評だった。

また、9月以後「ひろしま この人」など、祭典準備側からの発信も宣伝効果を発揮し、05年1月より109人増で278人を達成した。

事務局体制、事業・財政活動

選任スタッフ4人体制にボランティアスタッフを加えて事務局体制をつくり、実行委員会は8回もった。9月、作業券宿泊用に第2事務所を借りた。10月より昼夜食の炊き出

し体制に入り、事務局員他の健康維持をとエネルギー補強に大いに貢献した。

祭典財政はチケット普及、賛同募金等のとりくみと共に、出版、Tシャツ、物産、ツアー事業で組んだ。チケット収入、ツアーが目標に及ばなかったが、賛同募金、プログラム販売及び広告収入、目標を超過達成し、物産販売、オプションツアー（ナイトクルーズ）が健闘した。

財政は、祭典の財産として直ぐとりくんだビデオの大普及の全国連帯活動で、わずかだが黒字で納めることができた。

企画総括

3つの音楽会

音楽会 ピースウェーブコンサート は、全国祭典幕開けの歓迎演奏会であるとともに、被爆の記憶を綴り、平和のうたごえを響かせる音楽会となった。郷土色豊かに演じられた「音戸の舟唄」、太鼓構成「太田川」（劇団月曜会）をうけての益田遥バリトン独唱（『八月の歌』他）、村上弦一郎ピアノ独奏（『葬送』他）、平均年齢85歳のシニアコーラス「トワ・エ・モア」、そしてピースウェーブ合唱団「炎の歌」（猪原龍吉指揮、全国連帯による）は、95年以来つづけられてきたピースウェーブコンサートの財産を活かした企画・演奏であり、聴き手の胸を打った。また、全国うたごえ男声合唱団（『未来をかけて』他、守屋博之指揮）と浅井敬壹指揮による日本のうたごえ合唱団（『大地讃頌』他）はともに深い感動とあわせてうたごえの高みを刻んだ。フィナーレに歌われた「うたごえよ高らかに」（池辺晋一郎作曲・指揮）は今祭典の基調となるものだった。

野外音楽会 いのちのハーモニー は、平和公園・元安川をはさんだ原爆ドームの対岸に舞台を移して、オープニング・アクト「献歌のつどい」（長崎・九州合同「平和の旅へ」等7団体）からはじまった。暮れなずむ川面にハンドベルの音が清らかに響きわたる頃には2500人の人々が兩岸いっぱいにもやい 結い の場をつくる中、被爆ピアノによる「月光」（村上弦一郎）の調べが流れた。ナターシャ&カーチャバンドゥーラデュオ（ウクライナ）の澄んだ歌声、金元中（韓国）の魂の歌声がドームをつつんだ。灯籠の灯が川面に揺れまたたき、歌びとの手に灯がともされ、そこに集う人すべてが唱和に加わった。「青い空は」（池辺晋一郎ピアノ伴奏）、そして「ヒロシマの有る国で」「折り鶴」「歌おう平和を」「故郷」。希望をつなぎ、いのちのハーモニーは地球を巡った。「3つの音楽会のうちでは、いのちのハーモニーが広島でやる祭典の特徴がきわだっていて、.....心に深く刻まれた」との感想が寄せられた。

大音楽会 ヒューマンフェスタ。「歌う人も観客も希いや思いを共有できる元気の出る素敵な空間だった」「この広島の地で、たくさんのメッセージ溢れる歌や音楽を全国から参加された人たちとともに感じる事ができた祭典だった」「オープニングの雄大な太鼓、圧巻でした。そして、最後の『ねがい』の構成、大変感動しました」「『共に生きる街』の舞台、生きる勇気がわいてきます」「祭典も思いっきりうたい、1000人の大合唱の醍醐味を満喫しました」と感想にあるように、参加してともに歌い楽しみ、明日に希

望をつなげる祭典となった。和太鼓、踊り・ダンス、歌の交流・交歓をとおして人間讃歌のうたごえが響きわたった。

プロローグ「生命の詩」の子どもも含めた160人太鼓によるいのちのほとばしり。構成詩劇と歌で子どもたちに核のない未来をと被爆者とともに発信した第1部「ヒロシマ・ナガサキから世界へ」。舞台いっぱい保育・教育・医療・福祉・高齢者・青年・女性・障害者など世代や分野を越えた500人余の人たちがつながりあって生きる喜びを歌い上げた音楽構成「共に生きる街」と、この街の暮らしを根っ子で支えている「希望の憲法・第九条」に光をあてた第2部。

そして第3部、8人の指揮者の共演で8曲を演奏する「明日へのヒューマンボイス」は1000人の大合唱となり、深く静かなドラマを生んだ。壬生の花田植、韓国民族芸能「サムルノリ」、山陽女子のバトントワリングに魅入り心躍らせた。そしてエピローグ「平和こそ未来」。ゲストのきたがわてつ、ナターシャ&カーチャ・グジー、金元中に、大州中学校の生徒たちも加わって全員で歌われた「ねがい」で会場は一つに結ばれた。

3日間にわたるひろしま祭典は、“被爆60年 輝けいのち・憲法九条”を各音楽会の基調として、ひろしまの心を「声をひとつに、ヒューマンボイス」と熱く歌い交わした祭典となった。それは、“うたごえは平和の力”を体現した「胸あつくなる祭典」だった。

振り返れば、祭典運動の期間は短く体制は不十分だった。その意味からもこの祭典の成功は、聴衆と歌い手、舞台スタッフに支えられてのものだった。合唱発表会で歌いきることの充実感・達成感と祭典（大音楽会等）で歌いかわすことの喜び・醍醐味が共に味わえるうたごえ祭典。その祭典の柱が大音楽会であることを思えば、大音楽会への、ことに大合唱への参加人数の確保遅れが舞台づくりに影響を与え、当日のスタッフ態勢の努力に負うところが大きかったこと、また、歌う側がさいごまで歌いきって（聴く側も集中が途切れることなく聴けて）その感動を持ち帰られるよう、終演時間を厳守した企画構成と進行に努めること、そして、大音楽会にふさわしく会場全体と交歓できる企画を工夫すること、の3点を大きな反省点としたい。

おわりに

広島開催の話が持ち上がって1年半、実行委員会が立ち上がって10ヶ月、時間的にも人的にも体制が充分でない中での取り組みであったが、この間の広島のピースウェーブコンサートの蓄積と全国の平和のうたごえの広がりによって被爆・戦後60年の節目の年にふさわしい内容で成功させることができた。

私たちは、この祭典を取り組む中で、広島のうたごえ運動をどう活性化させ躍動させていけるか、その展望を見出すことでもあった。その取り組みの母体はうたごえ協議会であり、この祭典でも運営を常にリードし、「歌って広げる」取り組みの中心でもあった。

地元の「歌って参加」の運動を地域に根ざした広げる運動につなげていく活動、全国の歌って参加の運動の広がりをつくることでの課題は残した。

祭典運動を通して、この取り組みで蒔いた種、積み上げてきたものをこれからどう発展させるかが見えてきた。

祭典のフィナーレで「うたごえよ 高らかに」と、そして「ねがい」にこめた平和への思いは被爆地から世界へ大きく発信された。

うたごえは未来を拓く。"ワクワク・ドキドキ"、その興奮と感動でもっと多くの人とつながっていくために、これからの10年をスタートさせたい。